

奈良県立医科大学学報



総合周産期母子医療センター

July
2008

vol.25

CONTENTS

総合周産期母子医療センター開設にあたって	1
7対1看護実現をめざして	2
ホオジロ通信	3
オープンキャンパス案内/看護部から	4
研究紹介<臨床病態医学・輸血部>	5~7
医療サービス課相談係を紹介しします	7
中国四川大地震国際緊急援助隊参加報告	8~10
病棟紹介 (B8・C6・C4)	11
科学研究費補助金の決定	12~13
オックスフォード大学との学術交流協定の締結について/ 住居医学研究奨励金交付決定一覧/住居医学研究会開催案内	14
レポート	15
国家試験合格状況/中島佐一学術奨励賞授賞式/ 下っ道/広告募集	16

総合周産期母子医療センター開設にあたって

副センター長 産婦人科学 教授 小林 浩

奈良県では平成18年、19年と2年連続で周産期医療に関する事案が発生し、県民の皆様ならびに医大の関係者には多大なご心配をおかけしたことでありますが、昨年11月から県立医科大学附属病院のA病棟で整備していた総合周産期母子医療センターの主要な工事が終了しました。母体胎児集中治療室(MFICU)が6床およびその後方病床が12床整備され、母体・胎児集中治療管理部門(産科)は2,200m²以上の広さを確保することができました。

365日24時間、安全と安心の周産期医療を提供するためにはハード・ソフト・ヒューマンが3拍子そろってうまく機能していかなければなりません。母体・胎児集中治療管理部門としてハードは整備されましたので、次は病病連携・病診連携のソフト面の充実を図る必要があります。奈良県産婦人科医会の諸先生方のご協力を得て、周産期の一次輪番制も構築され、すでに運用されております。着実に奈良県の周産期医療は進化しておりますので、今後とも皆様のご支援とご協力を切にお願い申し上げます。

副センター長 新生児集中治療部門 教授 高橋幸博

昭和56年10月に、本学に小児科医師と産科医師の協力で新生児医療のための新生児病室が開設され、その後、平成6年4月には新生児集中治療室、平成14年4月には周産期医療センター(新生児集中治療部門)として活動してきました。

この度、奈良県知事をはじめ、学長や病院長、県並びに本学教職員、建設工事関係者の皆様方の多大なご努力のおかげと、近隣の周産期施設のご援助により、工事期間中も母体・新生児医療を続けながらも、無事に総合周産期母子医療センターが完成しましたことは大変喜ばしく感謝しております。これによって、今後の奈良県の周産期医療を担う医師、助産師、看護師、パラメディカル養成を行なえる体制の第1歩ができたと考えています。今後も皆様方のご協力とご尽力を得て、その灯を絶やさぬよう努力したいと考えています。

「周産期医療センター」は、5月26日に県から「総合周産期母子医療センター」の指定を受け、同日付けで名称変更されました。病院長がセンター長を兼務し、併せて、両副センター長が配置されました。

7対1看護実現をめざして

附属病院看護部では、「7対1」看護体制の導入を目標として掲げている。

「7対1」とは良く耳にする言葉だが、実際にはどういう意味なのか？

今回は「7対1」看護体制の意味とメリット、「7対1」看護体制導入に向けての取り組みを今年4月から副院長兼看護部長に就任した佐伯部長に伺った。

本日は、よろしくお願いいたします。4月に看護部長に就任されてから3ヶ月が経ちましたが、これまでの感想をお聞かせください。

— 毎日忙しくて目が回っています（笑）。看護部では「7対1」看護体制の導入を目標に掲げておりますので、その達成に向けて全速力で走っている感じです。私は教育・研究の場で長くやってきましたので、久しぶりの現場で至らないところもありますが、8人の副部長や看護師長、そして現場のスタッフに支えられて何とかやっています。



「7対1」看護体制について、その意味を教えてください。

— 「7対1」看護体制とは、入院基本料の算定に使用される看護師配置基準のひとつです。現在、附属病院は「10対1」看護体制をとっています。この「7対1」や「10対1」というのは、患者様と看護職員の人数の比率を表しています。簡単に言えば、「7対1」ならば、患者様7人に対して1人の看護職員を配置しなければならず、「10対1」であれば、患者様10人に対して1人の看護師を配置すれば良いということになります。

「7対1」看護体制導入のメリットはありますか？

— たくさんありますよ（笑）。患者様、職員、病院のそれぞれにメリットがあります。まず、患者様にとっては、看護師がこれまでよりもたくさん配置されることになるので、手厚い看護を受けられるというメリットがあります。次に、職員にとっては、勤務にゆとりが生まれるというメリットがあります。既に「7対1」をとった病院では、看護職員の退職者が減少していると聞いています。最後に、病院にとっては、入院基本料の加算により、収入がアップするというメリットがあります。



「7対1」看護体制導入に向けて勝算はありますか？

— ある、と言いたいですね（笑）。附属病院は、とっても魅力的な病院です。職場の雰囲気は良いですし、何より職員の笑顔が素敵です。それに、看護知識や技術の向上にも熱心です。組織として、学習する風土があるというのは素晴らしいことです。施設についても、この10年程の間に3つの病棟を建設する等、きちんと投資がなされています。これらの魅力をしっかり伝えられれば、たくさんの方が、附属病院に就職して下さると思います。要は、伝え方の問題ですね。

最後に、「7対1」看護体制導入に向けて、具体的な取り組みを教えてください。

— 募集パンフレットの作成、卒業学校に貼っていただくポスターの作成、病院説明会、インターンシップなどなど、いろいろ行っています。これらは、すべて現場のスタッフの協力なしではできないことばかりです。募集パンフレットをはじめとして良いものが出来上がったことに感謝しています。また、看護学科の教員の方々が、学生に対して、附属病院の良さを積極的にPRしてくださっていることも非常にありがたいです。引き続き皆様のご協力をいただき、「7対1」看護体制を導入したいと思います。

附属病院、ひいては大学の飛躍のため、「7対1」看護体制の導入を期待しています。本日は、ありがとうございました。

**看護師 200名
助産師 募集**

病院説明会

**1日目/7月23日(水)
2日目/8月6日(水)**

試験日/8月30日・31日

応募締切/8月15日(消印有効)

詳しくは附属病院ホームページをご覧ください

大学創生と心のゆとり

医学部長 喜多 英二

奈良医大は、大和三山に囲まれた、歴史豊かな飛鳥の地に存在しております。1300年の時を超えて漂う悠久のロマンを、日々肌で感じながら働き、学べる、この恵まれた環境は、私達の自慢であります。この地で生まれ・育った本学は、昨年公立法人大学として、より一層の自主性・自立性を発揮し発展すべく、第一歩を踏み出しました。

医科大学である本学の使命が、「臨床の第一線で活躍する優れた医師や看護師等を養成し、医学の進歩に貢献できる研究者を育て、高度で先進的な医療を提供して地域に貢献するとともに、世界レベルでの医学・医療の進歩に貢献する」ことであることは、云うまでもありません。

今日の奈良医大には、あらゆる面での効率化を目指した改革、競争に打ち勝つ成果達成、一層の地域貢献が求められ、我々はかつてない速度で進行する変革に直面しております。このような変革への迅速な対応が、限られた人材と財源のもとで、地域社会に還元するための成果達成への大きな原動力になっていることは、疑いのない事実であります。

しかし一方で、急速な変化への対応は、日々の医療に携わる人々、研究・教育に従事する人々、大学・病院の運営実務を担う人々、全ての大学関係者の心の中から「ゆとり」を奪いつつあるのも事実であります。膨大な医学・看護学の専門知識を消化吸収しなければならない学生諸君においても、「心の若さ」が消失しつつあるように感じられるのです。病める人々の心身を癒すことを天職とする医師・看護師、さらには医学・看護学を学ぶ学生諸君の心の中から、「生命への畏敬の念、患者へのやさしさ」といった、感性や人間愛が希薄化するような大学の変革は、絶対に避けなければなりません。本学で働き学ぶ全ての人達が、吉岡学長がキーワードに掲げられる3Y、「夢」、「喜び」、「やりがい」を真に実感できる大学に変革していかなければなりません。

学生諸君においては、飛鳥・奈良時代には学問・文化・産業等の中心地であったこの地で医学・看護学を学んでいながら、慌ただしい日々の中で、万葉の香りを味わい、豊かな歴史・文化に触れることなく過ごしているのが現状ではないでしょうか。この万葉の地で学ぶ利点を生かして、勉学に励むと同時に、大和の自然や歴史・文化に親しみ、学外・地域の人達とも触れ合う多くの機会を持ち、豊かな人間性を大いに育てていただきたいのです。専門知識・技術習得に加えて、このような日々の活動が、感性や人間愛に満ちた医療人としての育成に大きく寄与するものと期待されるからです。このような活動のための時間は、自らが作るもので自然に湧いてくるものではありません。体力も知力も優れている学生時代こそ、勉学と同時に、教養を積み人間愛の涵養に努める絶好の機会なのです。幸いにも医学科では、学生諸君のこのような活動の時間を、「MDプログラム2006」の中で特別に設けられております。

教職員の方々におかれては、各部署ともスタッフ不足と限られた財源のもとで、「心身のゆとり」を感じられることもなく、日々の業務に追われていることを、十分に承知しております。それ故に、本学が直面する諸問題を各人が十分に認識し共有しあい（このための情報公開に努力してまいります）、お互いが協力し全員の英知と行動によって、少しでも「ゆとり」が感じられ、真に「3Y」を実感できる大学創生に一層の協力をお願いしたいのです。学生諸君が、将来本学や本学附属病院で働きたいと思えるような魅力作り、職場の環境・人間関係の構築、優れた先進医療の提供、独創的な研究の展開、有効な教育法・制度の確立などに向けて、それぞれの部署で各自が努力すること、それが新しい奈良医大創生の根幹をなすものであります。私も、そのような皆様の努力がすこしでも多く実るように、役員の一員として全力投球でその責務を果たす覚悟であります。

学生も教職員も常にポジティブ思考で、「心のゆとり」や「心の若さ」を失わずに、少々スローテンポであっても着実な奈良医大の発展に向けて、協力しあおうではないですか。



ホオジロ

【ホオジロ通信のいわれ】

ホオジロの鳴き声は「イッピツケイジョウツカマツリソウロウ(一筆啓上仕り候)」と聞こえるといわれます。本学教職員および関係者の皆様に一筆啓上仕るという意味で、この欄をホオジロ通信と名付けました。

8月9日(土)オープンキャンパスを実施します。

(学務課)

前年度に引き続き、今年度も夏休み中にオープンキャンパスを実施します。

実施内容は、下表のとおりです。なるべく多くの方が参加されるよう、お知り合いの方にお知らせ下さい。主な対象は、高校生及び受験生ですが、対象者を限定しておりませんので、どなたでも参加していただくことができます。

なお、実施にあたり関係の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

時 間	実 施 内 容
12:30～13:00	受付・施設見学申込み
13:00～13:50	講演会『医師・看護師を志す諸君へ』学長 吉岡 章
13:50～14:05	会場移動 医学科と看護学科で会場が別になります
14:05～14:15	学科紹介 医 学 科:喜多 英二医学部長 看護学科:飯田 順三看護学科長
14:15～15:00	在学生から受験生へのメッセージ
15:00～15:10	休憩
15:10～15:40	模擬ミニ講義 医 学 科 放射線医学教授 吉川 公彦 看護学科 母性看護・助産学教授 脇田 満里子
15:40～17:00	施設見学 附属病院・総合研究棟・基礎医学校舎・看護学校舎等を見学
15:40～17:00	個別相談 教員による相談コーナー 在学生による相談コーナー

～ボランティア募集～

今年度も医学科・看護学科合同で実施します。多数の参加者が見込まれますので、在学生の方で当日の受付、施設見学及び個別相談を手伝ってもらえる方を募集しています。

ボランティアの受付は、学務課厚生・入試係で行っています。

看 護 部 か ら

社団法人奈良県看護協会 平成20年度看護功労賞知事表彰

附属病院から、次の4名の方が受賞されました。おめでとうございます。

写真左より、萬谷静代看護師 川本たか子課長補佐 高橋英子看護師 松永眞澄看護師



看護功労賞知事表彰：

長年にわたり看護業務に精励し、顕著な功績があった保健師、助産師、看護師、准看護師に知事が表彰を行い、保健衛生の向上発展に資することを目的として、社団法人奈良県看護協会が実施しています。

大気汚染粉塵の気管支喘息発症におよぼす影響についての研究

教授 濱田 薫

平成20年度から看護学科に異動となりましたので、まだ、看護学科の先生方と協力しての看護学あるいは本学看護学科に貢献できる研究には至っておりません。その点につきましては現在勉強中ということとご容赦いただき、本稿では大気汚染と幼少児期の気管支喘息についての研究をご紹介しますと思います。

マウス喘息モデル

マウスの喘息モデルは、一般に卵白アルブミン(OVA)やダニ成分などの抗原を水酸化アルミニウム(alum)などのアジュバントと同時に腹腔内に投与することで全身的に感作し、その後に抗原溶液をエロソールや経鼻注入により気道に曝露することにより作成します。他には感作の方法として、経鼻やエロソール曝露で抗原を局所反復投与することもあります。一般には腹腔内投与を2回行い感作を確実にします。喘息病態は病理学的な気道壁の炎症像、経気管支肺胞洗浄(BAL)液中の炎症細胞、生理学的なメサコリン吸入による気道過敏性亢進、血清学的な抗原特異的IgE産生の検討により評価します。さらに病態解明には、分子生物学的検討に発展していきます。

妊娠中の大気汚染粉塵曝露によって子供の喘息が増える

新生児は免疫学的にも成熟していないため、出生直後には抗原感作が成立しにくいことがあります。3日齢のBALB/cマウスにOVA投与(5 μ g + alum 0.5mg)を1回だけ行い、その後2週齢あるいは5週齢で抗原溶液をエロソール曝露しても十分な喘息病態を呈しません。これに対し妊娠中の母親マウスに大気汚染粉塵として、浮遊粒子状物質の一つである石油燃焼灰燼(ROFA)の溶出液(50mg/ml)を曝露したところ、生まれた仔マウスは同様の感作、抗原曝露でも明らかな喘息病態を呈し、妊娠中の大気汚染粉塵曝露によって子供の喘息感受性が高くなることが示されました。本来であれば出生時にはTリンパ球はTh2優位であり、その後すぐにTh1優位に変化しますが、ROFA溶出液に曝露された母親から出生した仔マウスは、Th2優位の状態が遷延していることを確認し、このことが感作を促進したものと考えられました。大気汚染粉塵中の金属などの成分が、経胎盤的に胎児に移行していることも認められており、機序に影響しているものと考えています。もちろん曝露によって変化した母親の免疫状態の影響も考えられます。このように、妊娠中の大気汚染粉塵曝露が、次世代の喘息発症を促進させることが示されました。

さらに、室内大気汚染物質として代表的なホルムアルデヒドやタバコ煙溶出液を用いて同様に実験したところ、ともに曝露群では喘息を発症しやすいことが示されました。これらの物質のそれぞれの作用機序の検討中ですが、増加していることが社会的にも問題となっている喘息やアレルギー疾患の発症に室内外の大気汚染曝露が関与していることが示されており、回避することで一次予防の可能な大気汚染の問題は現在でも社会的に重要といえます。妊娠中の喫煙が子供の喘息発症に影響することは疫学的にも示されています。浮遊粒子状物質は、黄砂の影響と同様に多国間の問題ともなっており、この研究結果が社会的にも貢献できるものと考えます。

研究は木村弘教授の指導の下、主に須崎康恵先生と行い、伊藤利洋先生、宮本謙一先生、甲斐吉郎先生や消化器総合外科学の庄雅之先生の協力を得ています。一部はハーバード大学公衆衛生大学院Kobzik教授との共同研究です。

ADAMTS13による血栓性微小血管障害症の病態解析

准教授 松本雅則

輸血部の教員は、藤村吉博教授と私のわずか2人ですが、学内的には中央部門である利点を生かし臨床のみでなく基礎の先生方とも共同しながら、また学外的には国内や海外の研究者と協力して、ADAMTS13による血栓性微小血管障害症(Thrombotic Microangiopathy: TMA)の病態解析で世界に発信できる研究を行って参りました。

藤村教授の研究領域がvon Willebrand因子 (VWF)であったため、その切断酵素(現在ではADAMTS13と呼ばれています)の活性測定を1998年と比較的早期に確立できました。その頃、ADAMTS13は血栓性血小板減少性紫斑病(Thrombotic Thrombocytopenic Purpura: TTP)の診断に重要な検査として注目され始めた頃でした。当初この活性測定法は、マルチマー法という非常に技術的に困難な方法であったため、本邦の他の施設では測定できず当院へADAMTS13活性測定依頼が集中しました。TTPは、大腸菌O-157感染症で有名な溶血性尿毒症症候群(Hemolytic Uremic Syndrome: HUS)と臨床的に鑑別が困難であることが多く、両者を包括する病態名であるTMAを診断名として用いています

奈良医大輸血部では、ADAMTS13活性やそのインヒビター測定を中心としたTMA解析センターとして日本全国の医療機関から解析依頼を受け付けています。その依頼施設は、47都道府県すべてにおよび、400施設を超えています。2008年4月末までにADAMTS13活性を測定した原因不明の血小板減少は3000例を優に超えており、TMA症例だけでも882例に上る世界的にも類を見ない大きなデータベースを構築しました。

その結果を図1に示します。この症例の中からADAMTS13活性を遺伝的に欠損する先天性TTPのUpshaw-Schulman症候群を37例見つけました。このうち2006年までの28例については国立循環器病センターと共同で、それ以降の3例は当科専修生の加藤先生の協力によってADAMTS13遺伝子解析を行いました。その結果、日本人に特有の遺伝子異常を多数報告し、特に日本人の約10%がヘテロで持つ遺伝子多型を発見し注目されました。また、三重大学との共同研究で、特発性TTPでADAMTS13活性が著減している症例は、軽度～中等度に低下している症例に比べて血漿交換によく反応し、予後が良いことを見出しました。この結果より、TTPにおける新鮮凍結血漿を用いた血漿交換の有効性のエビデンスを明らかにしました。また、米国ノースウエスタン大学との共同研究で、薬剤性TTPの代表であるチクロピジンとクロピドグレルのTTP発症機序の違いについて報告しました。この2剤は抗血小板薬として頻回に使用されており、臨床医にとって非常に重要な情報として注目されています。本学第三内科との共同研究で、肝硬変の病期の進行に伴ってADAMTS13活性が低下することを報告し、進行した肝硬変が血栓傾向にあり多臓器不全に進展する可能性が示唆されました。また、本学消化器・総合外科とは肝臓移植後にはADAMTS13活性が低下することを明らかに、その時期の血小板減少には血小板輸血はむしろ禁忌で新鮮凍結血漿の投与が効果的であることを示しました。

このようにADAMTS13研究を通じて、TTPでの血漿交換の有効性のエビデンスの証明、血小板輸血禁忌の病態解析、新鮮凍結血漿の新たな効能の確立など輸血臨床に直結した成果を得ることができました。今後も輸血部として臨床に還元できる研究を続けていきたいと考えています。最後に、ADAMTS13研究に興味のある方は学内外とも共同研究は大歓迎ですのでご連絡下さい。

本邦TMA患者882例のADAMTS13とそのインヒター活性

	先天性TMA (n=61)		後天性TMA (n=821)											合計
	Upshaw-Schu Iman 症候群 (n=37)	原因不詳 (n=24)	特発性* (n=380)		薬物** (n=33)			膠原病 (n=212)	悪性腫瘍 (n=57)	造血幹細胞移植 (n=54)	妊娠 (n=14)	E. coli O157:H7 (n=31)	その他 (n=40)	
			TTP (n=275)	HUS (n=105)	TC/CL (n=21)	MMC (n=10)	他の薬物 (n=2)							
ADAMTS13 活性 (%)														
<3	37	0	187	0	17	0	2	44	4	0	4	0	7	302
3~<25	0	4	74	20	2	2	0	64	22	23	4	4	16	235
25~<50	0	9	13	45	1	5	0	65	20	16	3	17	6	200
≥50	0	11	1	40	1	3	0	39	11	15	3	10	11	145
インヒター (Bethesda U/ml)	(n=37)	(n=23)	(n=233)	(n=40)	(n=21)	(n=7)	(n=2)	(n=103)	(n=24)	(n=14)	(n=7)	(n=16)	(n=15)	(n=542)
<0.5	37	23	23	40	2	7	0	38	11	10	2	16	5	214
0.5~<2	0	0	117	0	8	0	2	45	8	4	2	0	6	192
≥2	0	0	93	0	11	0	0	20	5	0	3	0	4	136

* TTPとHUSの鑑別は臨床データによる。

** TC (テクロピジン)、CL (クロピドグレル)、MMC (マイトマイシンC)、他の薬物: PEGインターフェロン、バイアグラ

医療サービス課相談係を紹介します。

医療サービス課課長補佐(看護副部長) 川本たか子



案内役は26年間奈良県立三室病院で看護師として勤務し、この4月から初めて医大で勤務する川本です。

4月の組織改正で医療サービス課「医療相談係」は「相談係」になりました。相談係の場所は、病院本館1階、7番入退院受付横にある医療相談室のドアの奥です。相談員は9名(美男5名・美女4名)で、内6名は今年4月に配属された新人です。2名のベテラン相談員におんぶに抱っこ状態で日々悪戦苦闘しています。

相談係の主な業務は

- 各種医療・福祉制度利用の説明・手続きの援助。
- 患者・家族そして院内外の医療従事者からの相談と苦情対応。
- 訴訟案件など各種トラブルへの対応。等です。

5月の業務実績の一部を紹介すると、各種医療・福祉制度利用の説明や手続きの援助は640件で、院内の案内・医療相談・苦情に関する対応が190件でした。相談内容には入退院や転院・治療に関することや、医師、看護師からの対応に苦慮する相談や情報提供も含まれます。患者・家族から寄せられる**苦情の原因のほとんどは、職員の説明不足や不適切な接遇によるもの**です。相談係では、説明の充足と謝罪で対処しています。今後は、前向きな相談事案が増加することを期待しています。なお、同じく4月から、県警OBが相談員として配置され、患者・職員の皆様の安全に関する相談にも対処しています。

長年の看護の経験とこの2ヶ月の経験で、医療・看護が患者の体や心の痛みを治療する場であり、医療サービス課相談係は、病氣・治療に伴い個々に発生する社会的な苦痛を軽減する場であると感じています。

相談窓口の使命は、

- 患者の不安・不満の解消を図り医療に対する疑問や求めに迅速に対応すること。
- 患者等と医療従事者との相互理解を深め、医療の質向上や透明性を高めること。

です。

また、今年度は総合相談窓口の設置が予定されており、(窓口設置までの期間は相談室前で対応しています。気軽に声をかけてください。)がん診療連携拠点病院としてがん相談支援センターの役割も担う予定です。相談・苦情の対応には関連部署との密なる連携が重要です。各部署の皆様の御協力をお願いします。



相談係日々奮闘中!

中国四川大地震国際緊急援助隊参加報告

救急科 畑 倫明

【はじめに】

去る5月12日、日本時間午後3時28分、中国四川省においてマグニチュード8.0の大地震が発生しました。阪神淡路大震災を遙かに上回る規模の地震であり、死者・行方不明者を合わせると6月初め現在で9万人近くにまでおよんでいます。死者の数だけでも阪神淡路大震災の10倍を上回るわけですから、想像を絶する数字です。この未曾有の大災害に対して、中華人民共和国政府は建国後初めて外国からの救助チームを受け入れました。そして、世界で最初に被災地に入った外国チームは、紛れもないわれわれ日本の国際緊急援助隊救助チームだったのです。この度、私はこの国際緊急援助隊救助チームに帯同する医師として現地に赴きました。残念ながら、生存者の救出には至りませんでした。私にとっては貴重な経験であり、皆様にご報告したいと思います。

【発災・・・備えあれば・・・？】

先に述べましたように、発災は5月12日、現地時間午後2時28分でありました。私の知った第一報は「中国四川省で大規模な地震が発生した模様。規模はマグニチュード7.8、震源の深さは10km。小学校2校が倒壊、4人死亡、100人以上がケガ」というものでした。その後、徐々に実際の状況が明らかになっていきますが、初期の報道が如何に過小評価になっているかを示すいい例だと思います。ここで、ポイントはマグニチュ



断層が表面に現れ、崩れた道路

ードと震源の深さです。マグニチュードと震源の深さは当初から比較的正確な値が報道されます。内陸部でマグニチュード7.8、深さ10kmということは、少なくとも阪神淡路大震災よりも遙かに巨大な地震がさらに浅いところで、直下型で起こったということがいえるのです。このニュースを聞いた途端、私は直ちに派遣に備えて荷物の準備を始めました。備えあれば・・・です。

私には高2になる娘がいます。その娘が、ちょうど翌日から修学旅行に行くことになっていました。その娘の横で、いそいそと派遣の準備をする私を見て妻にからかわれてしまいました。「修学旅行に行く人より、嬉しそうね」と。

【いざ、被災地へ・・・しかし、未だ活動開始せず・・・】

緊急援助隊救助チームの招集は、5月13日の朝にあるだろうと予想したのですが、相手は中国です。スムーズにことは運びませんでした。最終的に緊急援助隊派遣のゴーサインが出たのは発災から3日も過ぎた15日となりました。瓦礫の下に閉じ込められた被災者を救助するのにタイムリミットは通常72時間とされています。つまり、今回の緊急援助隊救助チームの派遣はタイムリミットを過ぎてからの派遣となったわけです。

15日の夜に第一陣が出発し、私は16日の昼に第二陣として現地に向かいました。我々第二陣が成都に着いたのは16日の夜、あたりはもう暗くなっていました。しかし、急がなければなりません。我々は大量の資機材をトラックに積み込み、成都の空港から400km先の青川へ向け出発しました。第二陣の我々が合流するまでに第一陣はすでに活動を開始し、生後2ヶ月の赤ちゃんとその母親の捜索が夜を徹して行われていました。17日の昼前、我々が青川に着いて合流した時にはご遺体がすでに運び出された後でした。そして、ようやく合流した我々に告げられた次の指令は、むごいことに「成都側へ300km戻って北川で活動せよ」だったのです。すぐに活動を始められないことに対して苛立ち、悔しい思いをしながらも「次の北川では



北川の中心部被害状況

よい働きをするぞ」と、我々は心に誓ってひたすら移動を続けました。そして、300km戻って北川に着いた時、日付はもう18日に変わっていました。真夜中、北川に着いた時は激しい雨が降っていました。すぐにでも活動開始といきたいところでしたが、雨の降る真夜中からの活動は2次災害の危険があまりに高いと判断し、偵察部隊を出しただけで、本隊は車中泊となり、夜が明けてからの活動することとしました。

【チームは活動開始！

しかし、私の仕事は・・・】

今回の私の立場は、救助チーム付き医療班の責任者でした。救助チーム付き医療班最大の任務は実は救助隊隊員の健康管理なのです。ほとんど不眠不休で極めて危険な現場の救助作業を行う隊員たちを「無事に日本へ連れて帰ること」が、最大の任務というわけです。この時、私が最も恐れていたのは、隊員達の疲労と深部静脈血栓症でした。活動前から、病気や疲労でフラフラでは話になりません。隊員達には、十分な水分補給と適度な運動を指示しつつ、隊員がバスで仮眠をとっている間、我々は徹夜で本部テントや仮設トイレを設営し、さらに食事の準備にあたりました。いわば、今回の派遣は完全に縁の下力持ちというところでしょうか。もし、救助活動がうまく行って瓦礫の下から生存者を救出することができたなら、その時は生存者を介抱する我々医療班の献身的な活躍がテレビで放映されたかもしれませんが、それは本来の業務ではなくて、おまけのようなものなのです。

翌朝、まだ薄暗いうちから活動は開始されました。私の体内ではアドレナリンが大量に放出されているのでしょうか、全く眠くならず翌朝からの行動にそのまま移っていきました。私は医療班の他の3人（医師1人と看護師2人）に倒壊した中学校での救助活動のサポートを頼み、一人、北川中心街への偵察部隊に同行することにしました。10数名の隊員と共に生命探査装置を担ぎ、救助犬を連れ、北川の街に入っていくと、目を覆わんばかりの光景が続いていました。街は廃墟と化し、救助に来た中国の消防チームや人民解放軍の人たち以外に人影はほとんどなく、静まりかえっていました。

一般住民は皆すでに退避してしまったのでしょう。大きなビルが建ち並んでいたと思われる街並みは、原形をとどめているものはわずかで、多くは瓦礫の山と化していました。ご遺体が入っているとおぼしき袋が7つほど無造作に並べられ、あたりには死臭が漂っています。大きな山が目前に迫り、山肌は土砂崩れで削られてむき出しになっていました。そして巨大な岩が山裾のこの町のすぐ近く、手の届きそうな距離まで迫ってきました。もう一度大きな余震でもあれば、我々のいるところまで今にも落ちてきそうです。

我々のところにも、地震でできたダムについての情報は中国当局から入っていました。ダム決壊が起こった場合、3分以内で避難するようとの指示でした。3分で周囲は水浸しになり、水位は3m位になるという話です。しかし、周りを見回して目にはいるのは、崩れたビルが崩れかけたビルばかり・・・、「どこに逃げればいいのかろう？」さすがに、恐怖を感じました。



救助チーム活動風景

それでも、生存者はいないかと探査装置や犬たちとあちこち搜索してまわりました。しかし、もう発災後6日目、生存の可能性は限りなくゼロに近い状況です。「生命反応なし」という、むなしい報告が続きました。地元の建設局であった大きなビルの崩壊現場で、もしかしたら生存者がいるかもしれないという情報が入り、瓦礫の中へ隊員達が進入していきましたが、獲るものではありませんでした。そのうち、お昼近くになり、3頭いた救助犬の一头が瓦礫で怪我をしたため、私たちは一旦本部に戻ることにしました。今回の私の任務には救助犬の手当も入っているのです。犬好きの私には結構楽しい仕事でした。本部に戻って、救助犬の創部をよく見ると、ざっくり裂けた右手（正しくは右前足）が痛々しく、しっかり洗浄・消毒した上で、縫合処置をしてあげました。

【中学校倒壊現場で・・・】

午後、私は偵察部隊から一時離れ、中学校倒壊現場で活動している本隊に合流しました。レーダーによる探査で生命反応有りという結果が出たからです。一時、周囲は色めき立ちました。医療班が全員集合して、救出時の処置の準備や搬送先、搬送手段などの手配に入りましたが、最終的に生存者はなく、残念な結果に終わりました。やはり、発災から6日目という決定的なまでの時間の流れに対して、我々は全くの無力としか言いようがありませんでした。

中学校の倒壊現場には辛い光景が広がっていました。まだ救出してもらえずに、体の一部だけ見えている子供の遺体もあります。ふと、現場に落ちていた教科書を手にとって開いてみると、つい先日まで生き生きと躍動していたであろう子供達の光景が突然目に浮かび、「ガツン」と頭を何かで殴られたかのような衝撃でした。我が娘と変わらぬ世代の子供達が数え切れないくらい命を失ったという避けがたい事実が、急に現実のものとして認識されたのです。その後は、もう教科書やノートを手取るのはやめにしました。体が疲れている上に、これ以上は「心」がもちませんから。

その日の活動は夜の11時過ぎまで続き、私の連続活動時間はすでに40時間を超えていました。我々の隊は最終的に30名程度の遺体を発見し、十数名の遺体を回収できましたが、残りは中国のチームに託して本部に撤収しました。



救助チーム医療班と中国の医療チーム
左から3番目が筆者

【撤収そして帰国】

日本に帰ってくるまでの話はまだいろいろあるのですが、このあたりでやめておきましょう。発災後1週間目の全員での黙祷、成都のホテルでの歓迎、四川省副知事との会見、隊員全員の健康診断のことなど、いろいろありました。帰国したその日は、消防・警察・海保・JICA、それぞれの代表と私とで、高村外務大臣のもとへご報告に伺いました。帰国当日の外務大臣訪問は異例のことです。以前にそうしたことが行われたことは私の知る限りではありませんでした。日本国内での関心が高かったことの表れでしょうか。

今回、帰国して驚いたのは、日本国内で私たちの行動が驚くほど細かく報道されていたことです。ご遺体を前に、全員で黙祷している姿が中国全土に放映され、大きな反響を呼んでいたことも聞きました。常に結果を求められる救助チームの活動ですが、今回はその「努力の過程」と我々の「救助に対する真摯な姿勢」を評価してもらえたことは、嬉しいことでありました。生存者を救うことはできませんでしたが、中国の人たちに我々日本人の「こころ」を少しでもわかってもらえたことは、辛い気持ちで引き上げてきた私たちにとって大きな救いでした。

【最後に】

いつも、最後に思うことは「奈良医大救急科の皆さん、ありがとう！」ということです。快く送り出してくださる皆さんのおかげで、思う存分働いてくることができました。次は私に続いて、緊急援助隊に参加してやろうという方の活躍を待つばかりです。どうもありがとうございました。

病棟紹介

B棟8階



B棟8階病棟は、平成20年4月1日より耳鼻咽喉科25床，眼科15床，血液内科10床の混合病棟として、再スタートしました。看護スタッフは外来を含めて34名です。

眼科、耳鼻咽喉科の1週間は月曜日の10名前後の新入院から始まり、火曜、水曜、木曜、金曜日と毎日手術が続きます。そして週末に10数名の退院を繰り返す中、網膜剥離や眼球破裂、急性喉頭蓋炎の緊急入院の受け入れがあります。一方血液内科では白血病患者が対象で、病名を告知した上で、強力で繰り返し行われる化学療法や臍帯血、骨髄移植などの患者の看護に携わっています。そんな毎日ではありますが、看護師間でコミュニケーションを大切に、知識、情報の共有に努め、働き続けられる病棟づくりを目指しています。忙しいけれど考え方を変えれば、ひとつの病棟で、眼科、耳鼻咽喉科、血液内科、急性期や慢性期の看護が経験できる病棟は他にはありません。

只今B棟8階は成長の途上です。

私たちと一緒に、働き続けられる病棟づくりに参画しませんか！

C棟6階



C棟6階病棟は、心臓血管外科・呼吸器外科、皮膚科、形成外科、放射線科と3診療科の混合病棟です。

混合病棟という事もあり、入院される患者さんの疾患は様々で、手術を受ける患者さんや、IVRなどの最先端医療、化学療法など手術後の内科的治療を受ける患者さんまで、急性期から慢性期、終末期と幅広く入院されています。

総看護師数は外来を含め30名、平均年齢30才の若さと活気にあふれる病棟で、チームワークの良さを生かした看護を実践しています。

患者さんが「ほっ」とされるよう、笑顔で接し、安心して入院生活が送れるようスタッフ一同日々努力しています。

C棟4階



C棟4階病棟は、泌尿器科、放射線治療・核医学科の病棟です。平成20年3月23日に再統合した新しい病棟です。主に前立腺癌、腎臓癌、前立腺肥大症、食道癌、肺癌、転移性脳腫瘍などの患者さんが入院されています。治療として、手術療法や化学療法、放射線治療、ノバルスによる定位放射線治療が行われています。また県内での腎移植(生体・献腎)手術の多くが当院で実施されており、前立腺癌に対する小線源治療も行っています。その一方で、ターミナル期の緩和ケアも行われています。

病床数は30床で、スタッフはみんな明るく、人間関係もよい職場です。また個々の目標や、看護部の理念に基づき患者さんにとって、よりよい看護を提供できるよう日々努力しています。



平成20年度

科学研究費補助金の決定



(研究推進課)

研究種目	所属	職名	氏名	研究課題	研究期間
基盤研究B	消化器・総合外科学	教授	中島 祥介	肝細胞移植および肝組織作製治療の実現化にむけた前臨床研究	18~20
基盤研究B	脳神経外科学	教授	榊 寿右	血管新生因子抑制による脳梗膜動脈硬化の治療に関する研究	18~21
基盤研究B	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	教授	細井 裕司	実環境で最重度難聴者用超音波補聴システムを実現するための基礎的・臨床的研究	18~20
基盤研究B	口腔外科学	教授	桐田 忠昭	口腔がんにおける重粒子線療法の基礎的研究	18~20
基盤研究B	病理病態学	教授	小西 登	ヒト前立腺の組織幹細胞を用いた癌化の分子メカニズムに関する研究	19~21
基盤研究B	第二内科学	教授	木村 弘	睡眠時無呼吸による低酸素ストレスは全身性炎症を惹起し動脈硬化を促進させる	19~21
基盤研究B	放射線腫瘍医学	教授	長谷川 正俊	放射線感受性の腫瘍内不均一性に関する分子生物学的解析	19~21
基盤研究B	第二生理学	准教授	清水 壽一郎	心室壁の不均一性に基づく心筋分子モータ挙動と興奮収縮連関の統合的解析	20~22
基盤研究B	健康政策医学	教授	今村 知明	健康被害リスクへの過剰反応の発生確認と予測手法等の開発	20~22
基盤研究B	第一内科学	教授	斎藤 能彦	心腎連関の基盤たる分子機序の解明	20~22
基盤研究B	生物学	講師	高橋 昭久	温熱耐性獲得における細胞核ダイナミクス変化の解明	20~22
基盤研究C	整形外科	講師	田中 康仁	再生医療技術に応用した殺細胞処理骨の再活性化に関する実験的研究	17~20
基盤研究C	麻酔科学	准教授	川口 昌彦	脊髄血モデルにおける灰白質及び白質障害の長期的評価	17~20
基盤研究C	消化器・総合外科学	准教授	高 濟峯	肝移植におけるVWF切断酵素の役割と新たな拒絶反応診断マーカーの開発	18~20
基盤研究C	整形外科	教授	高倉 義典	骨髄間葉系幹細胞を用いた靭帯・腱付着部の構造再生に関する研究	18~20
基盤研究C	第一生理学	講師	豊田 ふみよ	フェロモン候補としてのイモリ腹腺ステロイドに関する研究	19~20
基盤研究C	第一生理学	教授	山下 勝幸	細胞内カルシウムストアの膜電位変化による細胞間シグナリング	19~21
基盤研究C	病理病態学	准教授	中村 光利	脳神経膠腫の病理診断および治療法選択のための遺伝子解析に関する研究	19~20
基盤研究C	病理病態学	助教	石田 英和	前立腺癌組織の三次元解析による腫瘍分布の検索と腫瘍発生・進展に関する研究	19~20
基盤研究C	分子病理学	講師	傳田 阿由美	肝幹細胞/前駆細胞の動態から肝発癌機構を捉える	19~20
基盤研究C	第三内科学	教授	福井 博	マクロファージと肝障害:Toll-like受容体制御による新規治療の探索	19~21
基盤研究C	第一内科学	講師	上村 史朗	慢性腎不全で加速される重症心血管疾患発症の分子機序の解明と新しい治療法の開発	19~20
基盤研究C	臨床病態医学	教授	濱田 薫	妊娠中の大気汚染曝露は次世代の気管支喘息発症を増加させる	19~20
基盤研究C	第一内科学	講師	岩野 正之	腎疾患進展におけるFSP1陽性ポドサイトの意義	19~20
基盤研究C	神経内科学	准教授	平野 牧人	神経変性疾患原因蛋白の核内輸送と発症機序解明	19~20
基盤研究C	小児科学	講師	杉本 充彦	血流状況下におけるVWF-ADAMTS13の機能連関の解析	19~20
基盤研究C	輸血部	准教授	松本 雅則	造血幹細胞移植後TMA/VODの成因解析	19~21
基盤研究C	小児科学	助教	野上 恵嗣	凝固第VIII因子活性化/不活化機構の解明と凝固/抗凝固療法への応用に関する研究	19~20
基盤研究C	精神医学	准教授	定松 美幸	モデル動物を用いた自閉症治療法についての検討	19~21
基盤研究C	精神医学	教授	岸本 年史	アミロイドベータに対する中枢神経細胞の防御機能に関する研究:遺伝子修復の観点から	19~20
基盤研究C	精神医学	講師	井上 眞	統合失調症の前頭葉機能と拡散強調画像との相関の研究	19~20
基盤研究C	放射線医学	教授	吉川 公彦	腹部大動脈瘤に対するステントグラフト治療:癌径推移に関する因子の検討	19~20
基盤研究C	消化器・総合外科学	学内講師	庄 雅之	T細胞不活性化制御による新規癌治療法の臨床導入を目的とした発展的研究	19~20
基盤研究C	消化器・総合外科学	医員	山田 高嗣	脂肪由来幹細胞の肝細胞特異的分化誘導における微小重力環境の影響	19~20
基盤研究C	消化器・総合外科学	学内講師	小山 文一	潰瘍性大腸炎に対する新しい遺伝子デリバリーシステムを用いたBcl-XL遺伝子治療	19~20
基盤研究C	胸部・心血管外科学	教授	谷口 繁樹	新しい心不全治療:三次元人工心筋組織の臨床応用を目指して	19~20
基盤研究C	胸部・心血管外科学	講師	吉川 義朗	重症不全心に対するRNAiと超音波を組み合わせた新しい遺伝子導入治療法の開発	19~21
基盤研究C	脳神経外科学	准教授	中瀬 裕之	脊髄損傷に対する胚性幹(ES)細胞を用いた再生治療	19~21
基盤研究C	寄生虫学	准教授	吉川 正英	ES細胞および骨髄間質幹細胞の脳内共同移植療法の開発-脳出血モデルでの検討-	19~20
基盤研究C	整形外科	准教授	矢島 弘嗣	再生医療技術を用いた血管柄付き移植骨増大の試み	19~21
基盤研究C	泌尿器科学	講師	石橋 道男	ガンマラクトン化合物を用いた腎障害後の進行を抑制する腎修復再生機構の解明	19~20
基盤研究C	産婦人科学	助教	坂田 麻理子	妊娠・授乳期の薬物動態に関する統合データベース作成及び情報提供システムの構築	19~20
基盤研究C	産婦人科学	助教	春田 祥治	子宮内膜細胞より産生されるピクニンの抗炎症作用の解明	19~20
基盤研究C	第一生理学	助教	杉岡 美保	ATP受容体サブタイプの機能的連関による網膜神経上皮細胞の増殖制御機構	19~20
基盤研究C	消化器・総合外科学	准教授	金廣 裕道	小腸移植におけるグラフト腸管の障害・再生機構の解明とその制御	19~20
基盤研究C	救急医学	准教授	西尾 健治	フォンヴィレブランド因子切断酵素による血栓形成制御に関する研究	19~20
基盤研究C	口腔外科学	講師	川上 哲司	静水圧ストレスによる顎関節滑膜細胞の応答	19~20
基盤研究C	口腔外科学	学内講師	川上 正良	顔面の初期発生を制御する分子機構	19~20
基盤研究C	基礎看護学	講師	青山 美智代	看護技術の修得レベルを適切に評価する取り組み	19~22
基盤研究C	健康政策医学	講師	御典 久美子	アカデミック・ハラスメント環境評価基準の策定とそれを用いた点検評価方法の確立	19~21
基盤研究C	第二解剖学	講師	辰巳 晃子	脳に分布する新規細胞外マトリックス構造の組織化学的解析	20~22
基盤研究C	第一生理学	講師	和田 佳郎	高速運動物体に対する動物視力の年齢的变化とその神経機構の解明	20~22
基盤研究C	保健体育	准教授	石指 宏通	高齢者のスポーツ活動における血栓形成機序の解明と予防策の構築	20~22
基盤研究C	教学	教授	藤本 圭男	射影代数多様体上の自己準同型写像の研究	20~22
基盤研究C	薬理学	教授	吉栖 正典	メタボリックシンドロームにおける酸化ストレスの関与の証明と新しい抗酸化療法の開発	20~22
基盤研究C	分子病理学	教授	國安 弘基	アンギオテンシン活性化機構を標的とする大腸癌肝転移治療戦略の確立	20~22
基盤研究C	地域健康医学	教授	車谷 典男	医療職に向けられた暴力的言動の発生件数の把握とその疫学的解析	20~22
基盤研究C	麻酔科学	助教	田中 優	手術室データをもとにした新しい病院コストモデルの作成	20~22

研究種目	所属	職名	氏名	研究課題	研究期間
基盤研究C	第三内科学	講師	吉治 仁志	レニンアンジオテンシン系の慢性肝疾患におけるクレストックと治療への応用	20~22
基盤研究C	第三内科学	准教授	植村 正人	重症肝疾患におけるADAMTS13の動態解析と制御機構の解明	20~22
基盤研究C	第二内科学	助教	友田 恒一	力学的呼吸負荷に対するヒト肺構造維持のメカニズム;コラーゲン線維三次元配列の解析	20~22
基盤研究C	神経内科学	教授	上野 聡	神経変性疾患におけるDNA修復能の検討と修復促進による治療基盤の確立	20~22
基盤研究C	小児科学	准教授	嶋 緑倫	第VIII因子活性増強抗体を用いた血友病A新規抗体療法に関する基礎的研究	20~22
基盤研究C	総合周産期母子医療センター 新生児集中治療部門	教授	高橋 幸博	新生児の血栓・DICの病因解明と治療法開発の基礎および臨床的研究	20~22
基盤研究C	先端研・RI	准教授	森 俊雄	XPD変異を共通する二つの遺伝疾患でなぜ紫外線皮膚発がん感受性が異なるか?	20~22
基盤研究C	皮膚科学	教授	浅田 秀夫	悪性黒色腫の転移におけるコネキシン26の役割の研究と転移阻害薬の開発	20~22
基盤研究C	中央放射線部	准教授	田岡 俊昭	アルツハイマー病での辺縁系回路の拡散テンソル異常一臨床症状・予後との関連一	20~22
基盤研究C	生物学	准教授	大西 健	変異型p53細胞を標的としたsiRNAによる放射線/温熱/抗がん剤増感の研究	20~22
基盤研究C	分子病理学	研究員	大森 斉	温熱療法による癌幹細胞の抑制と治療への応用の検討	20~22
基盤研究C	整形外科	助教	朴木 寛弥	骨軟部腫瘍における腫瘍幹細胞の単離と新たな分子標的療法の試み	20~22
基盤研究C	集中治療部	助教	佐々岡 紀之	新生児中枢神経における麻酔薬の神経毒性の検討	20~23
基盤研究C	産婦人科学	准教授	大井 豪一	羊水塞栓症診断のための新規マーカー探索と診療ガイドライン作成	20~22
基盤研究C	産婦人科学	講師	山田 嘉彦	新規分子標的抗腫瘍薬としてのサリドマイドを用いたオーダーメイド卵巣癌治療戦略	20~22
基盤研究C	産婦人科学	教授	小林 浩	子宮内膜症の癌化を規定する原因遺伝子の解明と臨床的診断法の確立	20~22
基盤研究C	口腔外科学	研究員	杉浦 勉	インプラント埋入直後および骨結合後の周囲骨のリモデリングに動的荷重が与える影響	20~22
基盤研究C	生命システム医科学	教授	坪井 昭夫	嗅覚系における神経幹細胞の嗅細胞への分化と個性獲得の分子機構	20~22
萌芽研究	化学	教授	大崎 茂芳	クモから学ぶ糸のリサイクルシステム	19~20
萌芽研究	産婦人科学	助教	金山 清二	網羅的シグナローム解析に基づくE-cellを用いた癌転移シミュレーションの構築	19~20
萌芽研究	寄生虫学	教授	石坂 重昭	初期化因子の解明一テララーメイド再生医療への応用に向けて	19~20
萌芽研究	第二生理学	助教	松吉 ひろ子	新たに発見された脳に分布する細胞学マトリックス構造の機能解析	20~21
萌芽研究	生物学	教授	大西 武雄	神経がん幹細胞のp53依存的放射線/抗がん剤/温熱感受性の検討	20~22
萌芽研究	第二生理学	教授	高木 都	損傷した腸管支配自律神経再生の試み	20~21
萌芽研究	産婦人科学	助教	古川 直人	大豆蛋白成分の網羅的解析による早産予防効果の実証実験	20~21
萌芽研究	寄生虫学	非常勤講師	木本 誠	マウス難聴モデルを用いた内耳再生の試み	20~21
若手研究(スタートアップ)	物理学	講師	高木 拓明	自発運動を通じた細胞の情報処理メカニズムの解析	19~20
若手研究(スタートアップ)	脳神経外科学	医員	松田 良介	脊髄損傷に対するES細胞移植治療一骨髄間質細胞を用いた腫瘍抑制効果の検討一	19~20
若手研究(スタートアップ)	産婦人科学	助教	成瀬 勝彦	合併症妊娠における着床異常の解明:アディポネクチンおよび関連サイトカインの関与	19~20
若手研究B	生命システム医科学	助教	吉原 誠一	転写調節因子Arx及びFozによる一次嗅覚神経回路形成機構の解析	19~20
若手研究B	神経内科学	講師	杉江 和馬	自己食空胞性ミトバチーの疾患概念確立とオートファジー機構の解明に関する研究	19~20
若手研究B	第二生理学	教務職員	三澤 裕美	心肥大のエネルギー消費機構とカルシウム動態の経日的解析	19~20
若手研究B	生化学	助教	山内 晶世	細胞内情報伝達物質サイクリックADPRiボースに対する蛍光プローブの構築	19~20
若手研究B	第二生理学	助教	張 國興	レニン・アンジオテンシン系に関わる受容体依存性リガンド非依存性心肥大の解析	19~20
若手研究B	第一内科学	助教	川田 啓之	亜急性血栓性閉塞および慢性期再狭窄予防を目的とした次世代型冠動脈ステントの開発	19~20
若手研究B	第一内科学	助教	竹田 征治	PIGFによる心保護効果を応用した急性心筋梗塞に対する新規治療法の開発	19~20
若手研究B	精神医学	助教	井上 雄一朗	ドーパミン神経を介した後シナプス細胞へのニコチン、エタノールの作用	19~20
若手研究B	放射線医学	助教	田中 利洋	肝癌に対する動注療法における薬物動態と血流改変術に関する研究	19~20
若手研究B	胸部・心臓血管外科学	研究員	田村 大和	放射光X線解析法による心筋クロスブリッジ動態解析一不全心のナノ診断から治療評価へ	19~20
若手研究B	胸部・心臓血管外科学	助教	木村 通孝	層構造を持つ人工気管の作成:上皮・筋肉・軟骨、三層構造による強度、抗感染性の獲得	19~20
若手研究B	胸部・心臓血管外科学	助教	内藤 洋	人工心筋組織移植による心筋梗塞治療:移植に最適な人工心筋組織の新たな開発	19~20
若手研究B	脳神経外科学	助教	田村 健太郎	ペナンブラ領域におけるグルタミン酸再吸収に関わるギャップジャンクションの働き	19~20
若手研究B	細菌学	助教	王寺 典子(下嶋典子)	トロホプラスト上のHLA-Eによる胎盤NK細胞の集積/分化機構の解明	19~20
若手研究B	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	助教	阪口 剛史	微小振動音源を用いた発声装置の声質改善のための基礎的検討	19~21
若手研究B	生命システム医科学	助教	高橋 弘雄	一次嗅覚神経回路における領域特異性決定の分子機構	20~21
若手研究B	地域健康医学	助教	富岡 公子	職業性アスベスト曝露集団の死亡リスクに関する歴史的コホート研究	20~21
若手研究B	第一内科学	医員	染川 智	心不全における転写抑制因子NRSFの役割 心・副腎連関について	20~21
若手研究B	寄生虫学	助教	王寺 幸輝	成体マウス毛包幹細胞を用いた発毛再生とWntの役割	20~21
若手研究B	皮膚科学	助教	井本 恭子	毛髪がタイガーテールを呈するトリコチオジストロフィーの遺伝子変異と臨床症状の関連	20~21
若手研究B	放射線医学	医員	西尾福 英之	MRI画像(ECR法)を用いた腫瘍細胞に対する抗癌剤早期効果予測の基礎的検討	20~21
若手研究B	脳神経外科学	助教	西村 文彦	マウス脳腫瘍モデルを用いた免疫治療の検討	20~21
若手研究B	第二解剖学	助教	奥田 洋明	大脳皮質由来オリゴデンドロサイト前駆細胞の分化多能性と移植後における動態解析	20~21
若手研究B	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	助教	西村 忠己	骨導超音波を用いた補聴器システムの評価と臨床導入	20~22
若手研究B	口腔外科学	医員	稲掛 耕太郎	自己歯髄由来間葉系幹細胞を用いた唇顎口蓋裂患者の顎顎部の治療法の開発	20~21
奨励研究	眼科学	視能訓練士	榎田 浩三	視野障害の評価は光覚や閾値で十分なのか?一形態覚視標を用いた新たな試み一	20

オックスフォード大学との学術交流協定が締結されました!

文責:第二生理学 教授 高木 都

このたび、奈良県立医科大学とオックスフォード大学（オックスフォード市、グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国）は、国際協力関係の確立が両機関にもたらす利益を認識し、学術交流協定を締結しました。

両機関は、平等と互惠を基本とし、双方が関心を持つ学術的分野において

- (1) 教職員及び研究者の交流
- (2) 講義、講演及びシンポジウムの実施
- (3) 学術情報及び資料の交換
- (4) その他の両者が合意した事項を促進する。

こととしています。

協定の締結日は2008年4月30日で、5年間有効です。ただし、本協定は、両機関で評価及び協議し、更新することができることとなっています。

署名者は、オックスフォード大学のHead of Department of Physiology, Anatomy and Genetics, University of OxfordであるProfessor Sir George Radda CBE FRSと本学の吉岡 章学長です。

奈良県立医科大学の構成員の方々が、この協定を積極的に活用し、国際交流を深めていただくように心からお願いする次第です。



平成20年度住居医学研究奨励金交付決定一覧

(研究推進課)

番号	題 目	研究代表者		
		所 属	職	氏 名
1	高齢者のQOLと住居環境に関するコホート研究・藤原京スタディ -	地域健康医学	教授	車谷典男
2	住居内微生物環境による免疫機能制御法の開発	細菌学	教授	喜多英二
3	ハウスダスト・シックハウスに関する研究	住居医学	教授	筏 義人
4	新生児・小児の入院患者・看護環境に適した病棟設計と病児の在宅療育・介護の住居環境設備に関する研究	総合周産期母子医療センター 新生児集中治療部門	教授	高橋幸博
5	アレルギー疾患モデル動物を用いたシックハウス症候群の免疫学的研究 (G0S2遺伝子の解析を中心に)	皮膚科学	教授	浅田秀夫
6	高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価	老年看護学	教授	守本とも子
7	聴・平衡覚と住居環境に関する研究	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	教授	細井裕司
8	住居における環境放射線の研究	放射線腫瘍医学	教授	長谷川正俊
9	シックハウス症候群関連化学物質の心筋イオン活動への影響	第二生理学	准教授	清水壽一郎
10	胎児期および乳幼児期の室内大気汚染物質が喘息発症に及ぼす影響についての検討	臨床病態医学	教授	濱田 薫
11	フィトンチッドによる抗細胞傷害分子機構の解析	第一解剖学	教授	東野義之
12	高度機能病院における双方向情報共有システムを利用した遠隔医療構築に関する研究	産婦人科学	教授	小林 浩
13	住居と心 - 住居が心(脳)に及ぼす影響・・・新生細胞の運命は?・・・	第二解剖学	教授	和中明生
14	住居環境における匂いの快・不快の感知に関する基盤研究	生命システム医科学 (脳神経システム医科学)	教授	坪井昭夫
15	外来化学療法室におけるがん治療患者に対する音楽が及ぼす癒しの効果に関する研究	腫瘍センター	准教授	神野正敏
16	在宅患者QOLを規定する骨格筋萎縮の調節機構の研究	生命システム医科学 (循環器システム医科学)	教授	中川 修
17	豊かな住環境と脳内環境とのつながり - 細胞外マトリックスリモデリングの観点から -	寄生虫学	助教	林 謹子
18	子育てに適した住居環境評価の分子生物学的基盤研究	生化学	教授	高澤 伸
19	快適な睡眠を目指した研究 - カオス解析を用いた睡眠時呼吸に及ぼす睡眠環境の影響 -	第二内科学	教授	木村 弘
20	在宅難病患者のケアニーズと音楽療法の癒しの効果	成人看護学	教授	瀬川睦子

第19回住居医学研究会を開催します!

- 日時** 平成20年7月18日(金) 16:00~17:30
- 演 題** 住環境と快適
- 講 師** 名古屋大学大学院環境学研究科 都市環境学専攻 教授 久野 覚 氏
- 会 場** 基礎医学校舎5階会議室

承認された規程、委員会名簿等については、随時、ホームページにて公開しています。

学内ホームページURL（閲覧は学内のみ可能）
top.naramed-u.ac.jp/ 「規程・名簿タブ」
は、公開ホームページに掲載
www.naramed-u.ac.jp/aff/johokoukai/

（総務課）

役員会及び教育研究審議会の報告

第1回 役員会（4月2日）

- 1 役員会等、定期的に開催する会議の日程を承認
- 2 今年度予定される教授選考の進め方について、教育研究審議会において意見聴取することを決定
- 3 吉田修前学長の本学特別顧問への就任（4月1日付け）を決定
- 4 教育研究審議会予定案件を承認
- 5 看護師の配置数を報告
- 6 敷地内禁煙の実施状況を報告
- 7 職員給与規程中、医師の初任給調整手当支給対象範囲の拡大について明記する旨報告
- 8 県警OB嘱託の採用について報告
- 9 校医の配置について報告

第1回 教育研究審議会（4月3日）

- 1 教育研究審議会が定めるところにより学長が指名する委員について、教育開発センター森田教授を委員として指名
- 2 平成20年度教授選考スケジュールを決定
- 3 産学連携推進のためのポリシー（案）について、教授会にて説明及び意見聴取を行い、その後、役員会で審議することを決定
- 4 医師・看護師等の国家試験結果を報告
- 5 大学院入学予定者数を報告
- 6 教育開発センター長及び兼務教員を報告
- 7 医学科学務委員会委員他8委員会委員の改選を報告
- 8 グローバルCOEプログラムの選考結果を報告

第2回 役員会（4月9日）

- 1 教授選考に関する規程及び同申合せの一部改正について検討
- 2 特任教員規程の一部改正について検討
- 3 産学連携推進のためのポリシーについて、研究部長をトップとしたWGで検討を行うことを決定

第3回 役員会（4月16日）

- 1 資金収支（キャッシュフロー）の状況について報告
- 2 （仮称）総合周産期母子医療センター整備事業のスケジュールについて報告
- 3 看護学科就職説明会の開催について報告

第4回 役員会（4月23日）

- 1 附属病院経営・運営会議規程を改正、4月1日付けで施行
- 2 医療情報システム運営委員会規程を改正、4月1日付けで施行
- 3 附属病院総合医療情報システム運用管理規程を改正、4月1日付けで施行
- 4 教育研究審議会予定案件を承認
- 5 看護師3名の採用を決定

第2回 教育研究審議会（4月23日）

- 1 教授選考に関する規程及び同申合せの一部改正（案）について、教授選考会議において意見聴取し、意見が無ければ承認
- 2 小児科学及び脳神経外科学の教授選考について、一部加筆修正のうえ、教育研究審議会として学長に答申
- 3 生化学・高澤教授より提出された発明届について、特許等を受ける権利を法人が承継しないことを決定
- 4 教育開発センター運営に関する申合せの一部改正（案）について、4月1日付けで改正することを承認し、役員会へ提案
- 5 医の倫理委員会委員の改選を決定
- 6 住居医学研究奨励金の交付決定について報告

第5回 役員会（4月23日）

- 1 小児科学及び脳神経外科学教授選考に係る基本方針を決定
- 2 教育開発センター運営に関する申合せを改正、4月1日付けで施行

第6回 役員会（4月30日）

- 1 債権管理規程を制定、4月30日付けで施行

第7回 役員会（5月7日）

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
- 2 オックスフォード大学との学術交流協定の締結を報告

第3回 教育研究審議会（5月8日）

- 1 中期計画（案）等について、県との協議結果を踏まえ見直すことを承認し、役員会へ提案
- 2 教授候補者選考委員会委員の選挙に関する申合せ（案）を承認し、役員会へ提案
- 3 特任教員規程の一部改正（案）を承認し、役員会へ提案
- 4 皮膚科学教室より推薦のあった臨床教授の選考を承認
- 5 第一内科学助教授竹田征治氏の海外留学を承認
- 6 寄生虫学助教1名の採用を承認
- 7 図書委員会委員の改選について、学長一任を承認
- 8 臨床研修センターの充実を図るため、専任教員の配置を承認
- 9 科研費の内示状況を報告

第8回 役員会（5月8日）

- 1 中期計画（案）等について、見直すことを決定
- 2 教授候補者選考委員会委員の選挙に関する申合せを制定、5月8日付けで施行
- 3 特任教員規程の改正を承認、5月8日付けで施行

第9回 役員会（5月21日）

- 1 教授選考に関する規程及び同申合せの改正を承認、5月13日付けで施行
- 2 教授候補者選考委員会委員の選挙に関する申合せを制定、5月13日付けで施行
- 3 耐震診断について、B・C棟は耐震対応である旨、A棟について、9月頃第三者機関の耐震診断を受ける予定である旨報告
- 4 看護師2名の採用を決定

第10回 役員会（5月28日）

- 1 職員採用計画を決定
- 2 職員提案制度（案）を検討、再度協議
- 3 看護師採用試験の近鉄社内広告の実施を決定
- 4 教育研究審議会予定案件を承認

第4回 教育研究審議会（5月28日）

- 1 中期計画（案）等の見直しを承認し、役員会へ提案
- 2 大学院研究奨励賞（骨子）を承認し、役員会へ提案
- 3 臨床講師の選考を承認
- 4 7月1日付け教員人事（案）を承認し、役員会へ提案
- 5 職員提案制度の実施（案）を承認、具体の対応は役員会で検討
- 6 図書委員会委員の改選を報告、任期未は平成22年3月31日
- 7 都市エリア産学官連携推進事業の採択を報告
- 8 プリセプタ室の設置を報告

第11回 役員会（5月28日）

- 1 中期計画等の見直しを承認
- 2 大学院研究奨励賞（骨子）を承認
- 3 7月1日付け教員人事を承認

第12回 役員会（6月11日）

- 1 職員採用計画（募集人員）を承認
- 2 平成21年度医学科入学者選抜要項を承認
- 3 （仮称）産学官連携推進委員会委員の選任を報告

第13回 役員会（6月18日）

- 1 附属病院規程の改正を承認、総合周産期母子医療センターの指定日である5月26日付けで施行
- 2 医療機器安全管理規程を制定、4月1日付けで施行
- 3 赤十字血液センター献血事業の兼業について、当分の間、「8時間の枠外としての兼業」として、各教室に協力依頼することとした旨報告

第14回 役員会（6月25日）

- 1 平成19年度決算を承認
- 2 教育研究審議会提案案件を承認
- 3 看護師7名の採用を決定
- 4 看護学科学生の就職応募状況を報告

第6回 教育研究審議会（6月25日）

- 1 看護学科カリキュラム改正骨子（案）等を審議、看護教育検討部会で再度検討のうえ、役員会へ提案
- 2 8月1日付け教員人事（案）を承認し、役員会へ提案
- 3 第一内科学助教授竹田征治氏の海外留学の期間変更を承認
- 4 精神科学教室より推薦のあった臨床教授の選考を承認
- 5 平成19年度の年度計画の評価（案）を承認し、役員会へ提案
- 6 医の倫理委員会規程の一部改正（案）を承認し、役員会へ提案
- 7 大学院博士課程入学料の見直し（案）を承認し、役員会へ提案
- 8 平成21年度医学科入学者選抜要項（案）を承認し、入試委員会で詳細を整理したうえで、医学科教授会議に提案
- 9 研究費補助金等の交付前使用に係る立替金に関する要領（案）を承認し、役員会へ提案
- 10 講座研究費・学会旅費の配分（案）を承認し、役員会へ提案
- 11 胸部・心臓血管外科学講座より申請のあった外国人客員研究員の受入れを承認した旨報告
- 12 （仮称）産学官連携推進委員会委員を選任した旨報告
- 13 中期計画（案）別紙予算の変更を報告

第15回 役員会（6月25日）

- 1 8月1日付け教員人事を承認
- 2 医の倫理委員会規程の一部改正を承認、6月25日付けで施行
- 3 料金等規程の一部改正を承認、6月25日付けで施行
- 4 研究費補助金等の交付前使用に係る立替金に関する要領を制定、6月25日付けで施行
- 5 講座研究費・学会旅費の配分について承認

国家試験結果

(学務課)

去る3月28日、厚生労働省により第102回医師国家試験(2月16～18日実施)の合格者が発表されました。今回の試験結果は下表のとおりです。

第102回医師国家試験

本学医学部医学科				平均合格率			
区分	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)	全国	国立	公立	私立
新卒	85	83	97.6	94.4	95.1	97.1	92.9
既卒	13	8	61.5	62.2	59.2	63.3	64.6
計	98	91	92.9	90.6	91.6	94.2	88.6

保健師(2月22日実施)、助産師(2月21日実施)、看護師(2月24日実施)国家試験の合格者が3月26日に発表されました。試験結果は下表のとおりです。

第94回保健師国家試験・第91回助産師国家試験・第97回看護師国家試験

本学医学部看護学科				平均合格率			
区分	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)	全国	大学	短大	養成所
保健師(新卒)	84	76	90.5	92	91.9	95.2	91.8
(既卒)	-	-	-	59.7	60.5	54.5	52
計	84	76	90.5	91.1	91	94.1	90.1
助産師(新卒)	10	9	90	98.3	97.8	97.3	99.3
(既卒)	-	-	-	94.5	92.6	90.9	97.6
計	10	9	90	98.1	97.6	96.6	99.2
看護師(新卒)	69	67	97.1	94.6	97.5	93.2	95.9
(既卒)	-	-	-	47.1	68.4	57.5	56.5
計	69	67	97.1	90.3	96.6	89.1	93.3

第15回中島佐一学術研究奨励賞の授賞式を開催しました

(研究推進課)

7月8日(火)、臨床第一講義室において、中島佐一学術研究奨励賞の授賞式が行われました。

今回の受賞者は、中央放射線部の田岡 俊昭准教授、第一内科学講座の中谷 公彦助教のお二人で、受賞者にはそれぞれ賞状、記念品の楯及び研究奨励金が授与されました。

引き続き実施された受賞者講演会では、受賞テーマに沿って、田岡准教授が「MRIによる脳機能の描出と臨床への応用」、中谷助教が「腎疾患およびそれに伴う心血管病変の発症・進展機構に関する研究」というテーマで講演されました。

この賞は、故中島佐一名誉教授のご遺族からの寄附金を財源として、医学の学術研究に優れた業績をあげた本学の若手教員に対して授与し、さらなる研究の発展を奨励することを目的としています。

毎年、各所属に応募要項を案内しておりますので、若手教員の積極的なご応募をお待ちしております。



後列；左より推薦者の斎藤教授、吉川教授
前列；中谷助教、吉岡学長、田岡准教授

下ツ道

(編集後記)

このたび、第一生理学 山下勝幸教授の後任として編集委員長に就任いたしました健康政策医学の今村です。

学報の創刊以来、長年に亘って編集委員長を務めてこられた山下教授の功績をたたえ感謝の意を表します。山下教授のようにうまく出来るかどうか分かりませんが、微力を尽くし、大学で起こっている事や重要な情報をタイムリーに大学関係者に届けることが出来るよう、頑張っていきたいと思っております。そのためにも皆様のご支援・ご協力をお願いする次第です。これからも学報とともどもよろしくお願ひします。

掲載希望の記事等については、各編集委員までお知らせください。

今村 知明(健康政策医学)
大西 健(生物医学)
粕田 承吾(法医学)
植村 正人(内科学第三)
中島小乃美(成人看護学)
澤 清美(看護部)
福留 隆二(研究推進課)
芳倉 亮(学務課)
北村 好伸(病院管理課)
鷹野 覚(総務課)
(印は委員長)

広告募集中!!

このページに広告を掲載しませんか?

広告掲載要綱はこちら (<http://www.narmed-u.ac.jp/procure/>) です。
広告掲載に関するお問い合わせは、総務課総務係(0744-22-3051)まで。